

令和7（2025）年度

情報活用力プログラム（数理・データサイエンス・AI（応用基礎レベル）教育プログラム）

情報活用力プログラム（基礎）（数理・データサイエンス・AI（リテラシーレベル）教育プログラム）

自己点検・評価結果報告書

「情報活用力プログラム」の要件を満たした場合は応用基礎レベル、そのうち基礎基幹科目の要件を満たした場合は「情報活用力プログラム（基礎）」としてリテラシーレベルが該当する。

京都ノートルダム女子大学 ND 教育センター

（令和8年4月27日）

自己点検・評価の視点	自己点検・評価体制における意見・結果・改善に向けた取組等																																																								
学内からの視点																																																									
プログラムの履修・修得状況	<p>「情報活用力プログラム」(以下、「本プログラム」)は 23 名が履修しており、前年度の 63 名から大きく減少した。応用基礎レベルのプログラムとなり、より専門的な科目が加わったことが影響していると思われる。</p> <p>●「本プログラム」履修者内訳</p> <table border="1"><thead><tr><th></th><th>1 年次</th><th>2 年次</th><th>3 年次</th><th>4 年次</th></tr></thead><tbody><tr><td>国際言語文化学部英語英文学科</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td><td>0</td></tr><tr><td>国際言語文化学部国際日本文化学科</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td></tr><tr><td>現代人間学部生活環境学科</td><td>1</td><td>0</td><td>0</td><td>1</td></tr><tr><td>現代人間学部心理学科</td><td>1</td><td>2</td><td>1</td><td>1</td></tr><tr><td>現代人間学部こども教育学科</td><td>0</td><td>1</td><td>0</td><td>2</td></tr><tr><td>社会情報課程</td><td>9</td><td>2</td><td>1</td><td>—</td></tr></tbody></table> <p>社会情報課程の学生については、全員が履修するよう指導しているため、申請漏れと思われる。一方で、他学科の履修が少なく、今後、定期的に履修の推奨を行いたい。</p> <p>令和7年度は、「本プログラム」5 名、「情報活用力プログラム(基礎)」(以下、「基礎」)は 6 名が修了した。</p> <p>●「本プログラム」・「基礎」修了者内訳</p> <table border="1"><thead><tr><th></th><th>本プログラム</th><th>基礎</th></tr></thead><tbody><tr><td>国際言語文化学部英語英文学科</td><td>0</td><td>0</td></tr><tr><td>国際言語文化学部国際日本文化学科</td><td>0</td><td>1</td></tr><tr><td>現代人間学部生活環境学科</td><td>0</td><td>2</td></tr><tr><td>現代人間学部心理学科</td><td>3</td><td>1</td></tr><tr><td>現代人間学部こども教育学科</td><td>2</td><td>2</td></tr><tr><td>社会情報課程</td><td>—</td><td>—</td></tr></tbody></table> <p>「本プログラム」について開設年度の令和3年度の履修者数 14 名から 2 名減少しての修了となっており、辞退者に対するフォローが必要である。一方、「基礎」については、要件を満たしていながら申請をしなかった学生もいると思われ、さらなる周知が必要である。</p>		1 年次	2 年次	3 年次	4 年次	国際言語文化学部英語英文学科	0	0	0	0	国際言語文化学部国際日本文化学科	0	0	1	0	現代人間学部生活環境学科	1	0	0	1	現代人間学部心理学科	1	2	1	1	現代人間学部こども教育学科	0	1	0	2	社会情報課程	9	2	1	—		本プログラム	基礎	国際言語文化学部英語英文学科	0	0	国際言語文化学部国際日本文化学科	0	1	現代人間学部生活環境学科	0	2	現代人間学部心理学科	3	1	現代人間学部こども教育学科	2	2	社会情報課程	—	—
	1 年次	2 年次	3 年次	4 年次																																																					
国際言語文化学部英語英文学科	0	0	0	0																																																					
国際言語文化学部国際日本文化学科	0	0	1	0																																																					
現代人間学部生活環境学科	1	0	0	1																																																					
現代人間学部心理学科	1	2	1	1																																																					
現代人間学部こども教育学科	0	1	0	2																																																					
社会情報課程	9	2	1	—																																																					
	本プログラム	基礎																																																							
国際言語文化学部英語英文学科	0	0																																																							
国際言語文化学部国際日本文化学科	0	1																																																							
現代人間学部生活環境学科	0	2																																																							
現代人間学部心理学科	3	1																																																							
現代人間学部こども教育学科	2	2																																																							
社会情報課程	—	—																																																							

学修成果	全科目においてルーブリックを導入しており、到達目標を明確にしたうえで授業を行っている。また、教員は本学の教務システムや LMS において、全履修者の状況を把握しており、一方で学生もこれらのシステムを使いリフレクション等を活用し、学修成果の把握を行っている。
学生アンケート等を通じた学生の理解度	本プログラム必修科目の授業アンケートをみると、回答率は 25.4%と少ないものの、授業の進め方やなどに関する設問の集計から、授業が適切に行われていることがうかがえる。以下の設問におけるポジティブな回答をみると、 <ul style="list-style-type: none"> ・この授業について主体的(熱心かつ意欲的)に取り組みましたか。 95.2% ・この授業の内容を理解し、学びが深まりましたか。 96.8% となっており、学生の理解が深まっていることがわかる。
学生アンケート等を通じた後輩等他の学生への推奨度	上記の授業アンケート結果から、履修生の評判も良いと思われ、他学生への推奨も期待される。
全学的な履修者数、履修率向上に向けた計画の達成・進捗状況	本プログラムは 23 名(履修率 2.9%)の履修にとどまっており、前年度 63 名から大きく減少した。
学外からの視点	
教育プログラム修了者の進路、活躍状況、企業等の評価	令和7年度の修了生では、システムエンジニアとしての就職が1名、ほかにも情報スキルを必要とする企業や学校教員への就職が多くみられ、本プログラムの成果がうかがえる。
産業界からの視点を含めた教育プログラム内容・手法等への意見	本プログラムについて、産業界からのニーズを共有する機会を設け、主要科目の内容に反映させていくといった仕組みを構築していきたい。
数理・データサイエンス・AIを「学ぶ楽しさ」「学ぶことの意義」を理解させること	必修科目を中心に見ていくと、「情報演習 I」においては、学生自身のタッチタイピングのスキルをデータで可視化することにより、学ぶ楽しさにつなげているといった工夫をしている。「AIとデータサイエンス入門」では、機械学習やデータの可視化といった、プログラミング技術が必要とされる演習を、Wolfram 言語を使って自分の手を動かしながら直感的に体験することによって、実際のしくみを理解し、自ら考え、試し、気づく力を育てることに重きをおいた授業を行っている。また文系学生が好む文学作品を使ったり、対象となるデータについても興味を持ちやすい身近なテーマを扱うことで、楽しみながら学べるよう工夫している。
内容・水準を維持・向上しつつ、より「分かりやすい」授業とすること	文系の女子大生にとって、本分野の内容を学ぶことをためらう学生が少なくないことは把握している一方で、学生の興味は近年高まってきている。所掌部署での会議や主要科目担当教員(専任・非常勤)によるワーキングをとおして、履修生の情報共有や学修支援について検討し、今後も授業内容やカリキュラムの改善を図りつつ、現代的ニーズにあったプログラムとなるよう進めていく。また、授業外でのサポートの充実も継続して行い、維持・向上を行っていきたい。